



フランツ・カフカの遠近法 - 『審判』と『城』における「視点」の問題 -

著者	庄司 知記
学位授与機関	Tohoku University
URL	http://hdl.handle.net/10097/00127360

氏名（本籍地）	庄司 知記 ^{しょうじ ともき}
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	学術（情）博 第 2 6 4 号
学位授与年月日	平成31年 3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科、専攻	東北大学大学院情報科学研究科（博士課程）人間社会情報科学専攻
学位論文題目	フランツ・カフカの遠近法 －『審判』と『城』における「視点」の問題－
論文審査委員	（主査）東北大学准教授 窪 俊一 東北大学教授 堀田 龍也 東北大学教授 森 一郎 東北大学教授 藤田 恭子 東北大学准教授 森田 直子

論文内容の要旨

第1章 カフカ研究および文学研究における「遠近法（視点）」の概要と背景

本論文はフランツ・カフカの物語を通して、文学研究における「視点」の問題を考察したものである。カフカは手紙や『日記』で、『判決』について「遠近法的变化」という言葉で説明していた。それは登場人物である「友人」を媒介として「父」と「息子」が多層的な対立を持つような変化であり、カフカの伝記的な事実が反映していると読むこともできる。この「父」と「息子」の対立から和解を求めていく問題を考察する必要性を指摘した。これまで、カフカの語りの「視点」をめぐることは、様々な言葉で説明されていた。また、映画メディアのパースペクティブを想起し、それを再現することの困難さが論じられていた。さらに、宗教を失った世界を描いたという背景も指摘されていた。本論文では、カフカのパースペクティブ論の最初期に提出された「我意的に物語る」という考えを応用する重要性を確認した。さらに、物語研究の進展の成果である物語を「見る視点」と「語る視点」の区別も明確にした。カフカのパースペクティブ論が見落としてきた物語の内容からも『審判』と『城』が「視点」の転換を問題としていることに注目し、物語の叙述方法と内容に関する双方の分析から、「相対化」という概念を提示した。

第2章 「不条理文学」としての『審判』再考

カフカの物語に対するパースペクティブ論が当初に問題とした「不条理」を再検討し、その重要性和課題を明らかにしている。パースペクティブ論の当初の目的は、思想と切り離したテキスト内在的なカフカ解釈を提唱することであった。まず、カフカの「不条理」を主張し、パースペクティブ論から異論が唱えられた論文を再検討した。そこでは、『審判』が「不条理」な作品であるとして評価されたのに対し、『城』は「希望」が書かれているため「不条理」ではないと批判的に読まれていた。カフカの物語に対する様々な読解を経て、現在は「不条理」を「悲劇」とするのではない、別な見方もできるものとなっていた。それは、『審判』におけるテーマであるヨーゼフ・K. (Josef K.) の「罪」の問題と「不条理」との関係である。パースペクティブ論からは、『審判』の叙述方法が「不条理」であるという見方であった。しかし、物語内容の面からK.が見て聞き知る他の登場人物とのやりとりから、彼の罪の問題は「思い違い」、つまり「視点」の転換が問題であり、それが物語の「不条理」と結びついている。また、『審判』における「法」の記述からは、「社会批判」を読むこともできるため、ヨーゼフ・K.だけではなく、裁判所組織・法への風刺として読むことについて検討した。先行研究では、ヨーゼフ・K.の態度だけをみれば「喜劇」とされ、裁判所組織・法の描かれ方だけをみれば「悲劇」とされる傾向にあったが、両方が裁かれているという解釈を提出した。加えて、K.の逮捕や訴訟、そして最期は、国家社会主義やスターリン主義などの予言として、戦後に「悲劇」として読む根拠を与えたことを指摘した。それから、パースペクティブ論が指摘した「読者を強く巻き込む」叙述に最も近く、「実存主義」的な「悲劇」を描いたと評されてきた映画『審判 (The Trial)』（1962年）を分析した。そして、「不条理」と表現できる逮捕と訴訟が、三人称だが一人称である「私」が顔をみせる主人公の語りによって、「掟」

を通して裁き裁かれる者が「相対化」され、解決を読者にも問いかけつつ、救われる糸口がありながら結局は「犬のように殺される」悲劇である結論づけた。

第3章 『審判』における女性／男性の人物造型——もう一つの〈訴訟〉——

『審判』を女性の人物造型に対する批判から考察した。カフカのパースペクティブ論や実存主義的解釈は軽視していたが、この物語では単に女性についてだけではなく、それを越えて女性蔑視が疑われる言説が数多くなされているからである。こうした女性への言及から『審判』はあくまで男性が描いた物語であるということにフェミニズムやジェンダー研究の立場から留意が求められている。本章では、まず、『審判』の女性像について、典型的な女性のチューブ（Typ）の対立についての場面から検討した。そこでは、保守的な女性と「新しい女性」が対置されていた。それは、作品全体を貫くテーマであるはずのヨーゼフ・K.の有罪と無罪の問題の裏で登場しているが、物語における「視点」との関係で重要性を帯びてくる。『審判』は基本的に三人称小説だが、常に彼の「視点」が反映されたものとなっている。そのため、K.が目の当たりにした彼を誘惑しているとも見える女性の様子が問われる。このように描かれた叙述方法が読者の解釈を異なるものへと導くことに注目し分析した。先行研究では、『審判』における女性と男性の人物像をそれぞれに別なものとして論じていた。しかしそれでは、男性と女性の性差を超えた散文は、どのようにしてなされるべきかという問いに答えを出すことは難しくなる。男性によって描かれた物語が主人公・ヨーゼフ・K.の「視点」から眺めた「女性」像だとするならば、公平を期するためには、彼を中心とした『審判』の「男性」像も同時に見てみる必要があった。そして、それら女性と男性の「人物造型」が物語全体に及ぼす意味についても考察しなければならないのである。そして、女性であるフロイライン・ビュルストナーの変貌は、男性であるヨーゼフ・K.の人物像の変貌と統一体をなしているだけではなく、『審判』が現す「掟」の信頼性に対する揺らぎを表現したものだという解釈を提示した。また、女性の存在感が大きいと評されてきた映画『トライアル—審判（The Trial）』（1993年）を考察した。最後に、『審判』における「人物造型」は、「法」を体現するかのような弁護士は別として、ある人物が他の箇所では異なる人物像として描かれており、女性と男性の両方が審理され、「掟」を通した遠近法的变化によって、「視点」が「相対化」されていると結論づけた。

第4章 『城』の人称変化について——「城」へ架ける橋——

『審判』から約8年後に書かれた『城』の人称変化について、一人称体から三人称体へと訂正された意味と意義について考察した。最初から三人称が選ばれた『審判』ではヨーゼフ・K.が語ることの信頼性は疑わしく、逮捕され起訴された彼の有罪性と無罪性が問題となっていたが、それでも銀行の役職に就いており、確かな社会的地位を有していた。一方、『城』はK.が測量士であることは事実か、本当に「城」から招かれたのかなどが不明なまま物語は進んでいく。このように、測量士K.の「立脚点（Standpunkt）」が揺らいでいることが『審判』との相違であるとして、「視点」の問題を再検討した。『城』は三人称であるが、そこではK.の考えが語られるだけでなく、地の文のみに注目するとK.の「視点」を狭めてしまう。パースペクティブ研究が進み、物語における「視点」とは誰が語っているのかではなく、「誰が見ているのか」が問題とされるようになった。つまり、『城』ではK.の目にしたものしか語られないため、K.が見聞きした他の登場人物の言動が重要な手がかりとなるはずである。まず、主人公である測量士K.とは一体どんな人物か、彼について他の登場人物から語られる箇所を抽出し考察した。次に、この物語で、特徴的な体験話法として語られる場面をいくつか分析した。そして、「私」体から「彼」体への変換した物語の「視点」は、主人公の心の内や言動を相対化しただけではなく、物語で描かれたある種の「権力」を「相対化」するために意図されたという考えを提起した。最後に、K.の語りのみ読めば確かに「視点」を制限してしまい、読者が見る「視点」も狭めてしまうが、他の登場人物がK.に向かって行く会話文を注意深くみれば、K.には「城」へと至る機会を見出す可能性があることを主張した。体験話法で書かれた「彼＝私」へと通じる「視点」によって、「主人公＝読者」の「視点」が統一するよう動いていくと結論づけている。

第5章 『城』における〈権力的なもの〉と性をめぐって——測量士K.の「希望」の行方——

第4章で導いた『城』における「権力」の「相対化」について具体的に検討した。『城』にお

いては、女性の登場人物が「権力と性」との関係で重要な役割を負っている。しかし、物語の中で「権力とは何か」が言葉で定義されることはない。それは、ここで描かれる「権力と性」が、単に男性と女性の間を媒介する権力問題や女性たちの間のタイプ (Typ) の違いといったフェミニズム／ジェンダー研究が対象とする二項対立の範疇を越えた問題だからである。加えて、カフカの物語における性的な言葉の使用や意味するところはすでに議論されてきたが、それらは単なるほめかし言葉による遊戯やフモアにとどまるのか、あるいは物語全体に作用するならばどのような重要性を持つのかについて検討した。K.と会話する登場人物たちが何を述べているのかに目を向け、それらの言動が読者に伝えるメッセージから「城」を眺めなければならない。そうして初めて『城』で幾度となく口にされる「希望」を見通すことができるようになり、「城」へ導く橋を渡ることが実現できる。その考察の過程において、他の登場人物の語りから、『城』の真のテーマである「視点 (Gesichtswinkel)」の問題を知ることになる。これらの分析から、描かれている「城」が体現する「権力」は正当なものではなく、K.を巻き込んで村人たちが「思い違い」に陥っており、幻想に踊らされていることを指摘した。そして、測量士 K.に対して「視点」の「相対化」を求めているという主張をした。また、ドイツ語で再現された映画『城 (Das Schloß)』(1997年)について分析し、物語で語られる事件や、暴露を再現せずにいることが、映画を損なってしまうと論じた。最後に、偽りで固められた世界から「城」へと近づくためには、「測量士 K. (主人公) = 読者」と統一を持って動く「視点」を「相対化」することが求められ、測量士 K.は真実に確固たる正しい女性である方へ向かうことが、「城」への道だと結論づけた。

おわりに

以上、本論文は、従来のカフカのパースペクティブ論が見逃してきた物語の内容からも『審判』と『城』が「視点」の転換を問題としていることに着目し、完全な物語の客観化を進め過ぎると個性を失ってしまうため、三人称に一人称の顔を見せ、主観化を維持することで、主人公と読者の「視点」が一致するように動くカフカの叙述を解明したものである。未完に終わったが、『城』は叙述方法だけではなく、内容においても『審判』よりも積極的な前進である。